

令和五年度卒業式式辞

校門のそでにたたくむ梅の木の蕾がほころび、校庭の楠が天を仰ぎ、国安川ほとりの草木も息吹きはじめ、小鳥はさえずり、麗らかに春の訪れを告げ始めている今日の佳き日に、愛媛県議会議員毛利修三様、PTA会長本田雅也様、同窓会長板倉定夫様、他多数の御来賓の皆様の御臨席を賜り、愛媛県立吉田高等学校第75回卒業証書授与式が挙行できますことは、我々教職員一同の大きな喜びであり、深く感謝いたします。

ただ今、卒業証書を授与された82名の皆さん、卒業おめでとう。卒業生の御家族の皆様方におかれましては、入学以来、お子様を支え、日々たくましく成長していく姿を御覧になられ、喜びもひとしおのことと存じます。また、三年間の御労苦と御慈愛に対しまして、深く敬意を表しますとともに本校の教育活動に多大なる御支援・御協力を賜りましたことに厚く御礼を申し上げます。

今年度になってようやくコロナ前の状況に戻りつつありますが、皆さんは、入学してしばらく続いた制約の大きい生活の中でも、勉強に部活動にいつも生き生きと前向きに取り組んできました。体育祭や文化祭などの学校行事に励む姿は、ずっとこの目に深く焼き付いています。

令和6年の幕開けとともに能登半島地震が起こり、多くの犠牲者が出ました。今もなお大勢の方が避難生活を続けておられます。亡くなられた方々には心より哀悼の意を表しますとともに、被災地の一日も早い復興を祈っております。ここ吉田町も、平成30年の西日本豪雨災害では、甚大な被害を受け多くの犠牲者が出た地域です。今年度は、学校全体で防災教育に取り組み、防災に関する様々な学習を通して、皆さんの防災への意識も高まったと感じています。

能登半島地震では、少しずつ復興に着手し始め、ライフラインの復旧や学校の再開を喜ぶニュースが聞かれますが、その中で、生きている方がなぜ自分だけ助かったのかと考え、心理的な罪悪感を抱いているというようなことも取り上げられていました。本日は、皆さんが無事ここまで元気に生きてきて、これから未来を切り拓いていこうとする門出の日です。こういう日だからこそ、今生きていることを大切に思っしてほしいのです。

「メメント・モリ」という言葉を耳にしたことがありますか。ラテン語で「自分がいつか必ず死ぬことを忘れるな」という意味です。アップル創業者の故スティーブ・ジョブズ氏が、2005年に米スタンフォード大学の卒業式で行ったスピーチで、まさに「メ

ント・モリ」について語られました。このときジョブズ氏は、癌を宣告され、死と向き合っていました。

死というものがただの概念だった頃より、確信をもって言えることがあります。それは、「誰も死にたくはない」ということです。・・・しかし、死は我々全員の行き先です。

あなた方の時間は限られています。だから、本意でない人生を生きて時間を無駄にしないでください。・・・他人の考え方に囚われてあなた方の内なる声がかき消されないように。そして何より大事なものは、自分の心と直感に従う勇気を持つことです。

本校の前身である吉田中学校の設立に携わり、校訓の起草者である村井保固氏は、90回目の太平洋横断で、日本に帰国したあと病床に臥し、最後を迎えることとなりますが、見舞に来られた方に、

神に問ひ 人に学びて今日も又 昨日にまさる人となりたし
という歌とともに、「病床にある今も日々己を新たにすることを楽しみにしている」と伝えられました。

愛媛吉田に生まれた青年が日本を代表する実業家となり、ニューヨークでその名を轟かせ、どんなときにも常に前を見据えて、出会った人を大切にし、楽しみながら行動したその気質が本校には脈々と流れています。卒業生のみなさんは、これから直感を信じてすでに思い描いている何かに向けて、出発をしていきます。高校三年間で培った「自律」「忠誠」「愛物」「邁往」の気概とともに、日々、新しい自分を見つけながら前進を続けてください。

卒業生、及び、御家族の皆様、重ね重ねおめでとうございます。

卒業生の旅立ちの日に際し、それぞれが選んだ未来に向けて、力強く羽ばたき続けてほしいと心から願い、式辞といたします。

令和六年三月一日

愛媛県立吉田高等学校

校長 村井 浩昭